

にほんいち すいげん さと  
日本一の水源の郷をめざして

とうしむら  
道志村

むかし のうりんぎよぎょう  
昔からの農林漁業 ③



はなま あゆ  
鼻曲がり鮎

どうしがわ せいりゅう あゆ きひん うつく かわざかな  
道志川の清流にすむ鮎は、気品のある美しさから川魚  
の女王ともいわれ、くわ あじ よ さから にんぎ さかな  
加えて味の良さから人気のある魚  
です。また香りが良いことから「香魚」とよばれていま  
す。ダムがなかった頃、ころ げきりゅう かわ せ  
激流にもまれながら川の瀬を  
のぼ どうしがわ あゆ はなま あゆ ゆうめい とくさんぶつ  
上る道志川の鮎は、「鼻曲がり鮎」として有名な特産物  
でした。えどじだい しょうぐんけ けんじょう おさいあゆ  
江戸時代には将軍家にも献上され「御菜鮎」と  
よ ゆうが み ひ こうぎよ いま どうし  
呼ばれ、優雅で身が引きしまった香魚は今でも道志の  
ひょうばん かわざかな だいひょう  
評判の川魚の代表です。



はなま あゆ  
「鼻曲がり鮎」

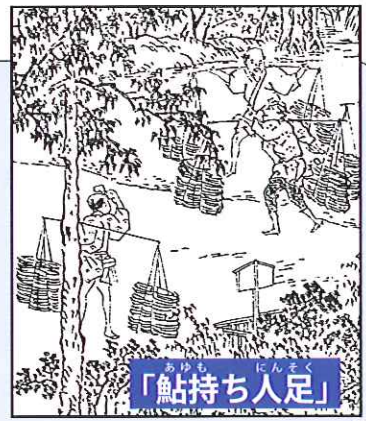
むかし どうしがわ げきりゅう あゆ  
昔、道志川の激流にもまれていた鮎は、  
くち きんにく ほったつ うわ  
口の筋肉が発達して上あごがコブのよ  
うにふくらんで曲がっていることから  
「鼻曲がり鮎」といわれました。



あゆ  
「鮎のはみあと」

いし つ も けず あゆ  
石に付いている藻を削りとった鮎の  
た  
食べたあとを「はみあと」といいます。

どうしがわ しょうぐんけ けんじょう おさいあゆ  
道志川は将軍家に献上する「御菜鮎」  
の産地として指定されていました。  
かんざつ りょうし りょう  
鑑札をもらった漁師だけ漁ができ、  
ねんかんせんびきじょう けんじょう おお  
年間千匹以上も献上しました。大き  
さが定められた鮎は、かごに入れら  
れ「鮎持ち人足」が夕方出発して早  
ちよう えどじょう とど  
朝には江戸城に届けられました。



あゆも にんそく  
「鮎持ち人足」



どうしがわでんせつ  
道志川伝説

かまぶち おとひめ  
釜淵の乙姫さま

どうし でんせつ  
道志の伝説②

むかし そうべえ いんきよ いえ きぎ の えだう  
昔、惣兵衛さんちゅうご隠居がいてなあ。家のまわりの木々が伸びてきたんで、枝打ちをした  
んだ。すると手がすべって斧を湯本の釜淵へ落としちまってな。探しに淵へ降りていったんだが、  
おの み ふち おく おく さが はい  
斧は見つからねえ。でな、淵の奥へ奥へと探しに入っちゃった。そしたら乙姫さまのような、そ  
れはきれいなおんなひと  
おんなひと  
れはきれいな女の人がよ、いたんだ。そんで「あなたの斧は、わたしが持っています。なにかお  
もしろい話をしてくださったら、返してあげましょう」といったちゅうだ。そんでじいさんが、  
じぶん みき はなし おとひめ よろ ちそう はなし  
自分で見聞きしたことを話たらよ、乙姫さまはたいへん喜こんでな、ご馳走になったり、話をし  
たりで二、三日そこで世話になってしまったんだ。でも、じいさんもいつまでもそこにいるわけ  
にいかねえからよ「そろそろ、かえりてえ」ちゅうと、管の糸巻きをお土産に持た  
せてくれただ。そして、いえ かえ きようてん おが ひと  
家に帰ってみるとびっくり仰天。なにやら拝む人もいた  
ちゅうことだ。そこで話を聞いてみると、じいさんは死んだことになってて、  
しゅうき じゆんび  
一周忌を準備してたちゅうだ。「こうこう、こういうわけで、おりゃあ、斧を  
お と おとひめ  
落として取りにいったけど、こういうわけで、乙姫さまのところで、ご馳  
走をよばれて、けえってきただ」とじいさんがいったところ  
「それじゃあ、一周忌どころじゃねえ、お祝いだあ」という  
わけで、おじいさんの帰りを祝ったそうだ。  
それから、おとひめ いとま つか  
乙姫さまからもらった糸巻きだが、それを使っ  
はた お おりもの お  
て機を織ると、たいそうきれいな織物がいくらでも織れた  
ちゅうだ。



どうしがわでんせつ  
道志川伝説

おおぐり かっぱ  
大栗の河童



かっぱ にんげん しり て ひぬ  
河童は、人間のお尻から手をいれて「しりごうだま」を引き抜いて  
た だいす  
食べるのが大好きだちゅう。  
おおぐり す はたけしこと かえ おおぐり うし  
大栗に住んでいたヨウベイじいさんは、畑仕事の帰りに大栗の牛  
ぶち はし わた まいにちまいにちいえ かえ  
淵ちゅうところの橋を渡ってな、毎日毎日家に帰ってたわけ。  
そいで、その牛淵にやってくると、かなら こ うし  
そいで、その牛淵にやってくると、必ず子どもが後ろからついて  
きて、お尻をチョコチョコと撫ぜちゃあ、いなくなっちゃう。  
「どうも、毎晩おれが通ると、どうも子どもに化けた河童がけつを  
な まいばん とお こ ぼ かっぱ  
撫でる。なにかうまい方法はないか」と思案したじいさんは、ヤカ  
ンのふたを針金で尻にくくりつけたんだ。で、いつものようにその橋のところを通ると、  
あの子どもが後ろからやってきて、お尻を撫でまわすんだ。なんぼ撫でててもヤカンのふ  
たを付けてるから、どうしようもない。とうとう河童は「じいさんのけつは、かなっけ  
つでだめだ」とあきらめて、それっきり出なくなったちゅうことだ。